

# 王陵の地域史研究

～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅹ～

2016



# 例 言

- 1、この調査は「飛鳥地域の地域史研究」の一環として行った測量調査である。主な調査地は以下の通りである。
  - ・岩屋山古墳 奈良県高市郡明日香村大字越
  - ・平田笠原古墳 奈良県高市郡明日香村大字平田
  - ・上コザカ古墳、上墓ノ上古墳 奈良県高市郡明日香村大字上
- 2、測量調査に際しては、古墳の土地所有者の各位にご理解あるご協力をいただき、順調に進行、完了したことに深謝の意を表したい。また調査・資料収集等に際してご尽力を賜った関係各位に感謝の意を表します。(五十音順・敬称略)  
相原嘉之、猪熊兼勝、上田裕人、浦野喜徳、河上邦彦、辰巳月美、長谷川透、米田文孝
- 3、遺跡分布図は、国土地理院発行の二万五千分の一「畝傍」と明日香村都市計画図(1:2500)を使用した。
- 4、本書の執筆は西光慎治、辰巳俊輔があたった。
- 5、墳丘・石室測量図の製図は西光慎治・辰巳俊輔が行った。
- 6、関係書類・図面等は西光慎治が保管している。
- 7、本書の編集は西光慎治が担当した。

## 目 次

例言 目次	(67)
第1章 調査に至る経緯と目的	(68)
第2章 飛鳥地域の測量調査	(69)
第1節 地理的・歴史的環境	(69)
第2節 岩屋山古墳測量調査報告	(74)
1. はじめに	(74)
2. 測量調査報告	(80)
3. 表採遺物	(83)
第3節 平田笠原古墳	(88)
1. はじめに	(88)
2. 踏査報告	(88)
3. 表採遺物	(88)
第4節 上コサガ古墳・上墓ノ上古墳踏査報告	(90)
1. はじめに	(90)
2. 踏査報告	(90)
3. 表採遺物	(90)
第3章 総括	(92)

## 第1章 調査に至る経緯と目的

飛鳥地域には多くの後・終末期古墳が分布していることは周知のことである。しかし未だ資料化されていないものも少なくない。こういった中、1982(昭和57)年以降、奈良県橿原考古学研究所や関西大学文学部考古学研究室等によってキトラ古墳をはじめ牽牛子塚古墳や岩屋山古墳、塚本古墳などの測量調査が実施されている。こういった測量調査は基礎資料の資料化として地域史研究にとって重要な役割を担っていることはいうまでもない。

今回の調査は筆者が飛鳥と周辺地域の地域史像の解明に向けて取り組んでいる「飛鳥地域の地域史研究」の一環として企画し、土地所有者のご厚意・ご協力のもと測量調査・踏査を実施したものである。調査は通常勤務に支障のないことを期したため、休日や年末・年始を利用した断続的な調査となった。調査期間は岩屋山古墳の墳丘を平成22(2010)年5月～平成23(2011)年1月に石室を平成23(2011)年1月から4月にかけてのべ26日間行った。平田笠原古墳・細川谷古墳群の踏査については平成27(2015)年4月から11月にかけてのべ12日間実施した。

### 【調査体制】

調査体制は以下の通りである。

	岩屋山古墳	平田笠原古墳	上コザカ古墳・上墓ノ上古墳 (細川谷古墳群)
担当者	西光慎治	西光慎治・辰巳俊輔	西光慎治・辰巳俊輔
調査員	辰巳俊輔	上田裕人	上田裕人

### 【見学会の開催】

参加者を中心に測量調査の深化と比較検討を行うため、見学会を実施した。見学した古墳は以下の通りである。

赤坂天王山古墳、岩屋山古墳、打上古墳、カツマヤマ古墳、カンジョ古墳、艸墓古墳、権現堂古墳、小谷古墳、菖蒲池古墳、新宮山古墳、谷首古墳、谷脇古墳、東明神古墳、塚本古墳、花山西塚古墳、花山東塚古墳、真弓鐘子塚古墳、マルコ山古墳、都塚古墳、文殊院西古墳、文殊院東古墳

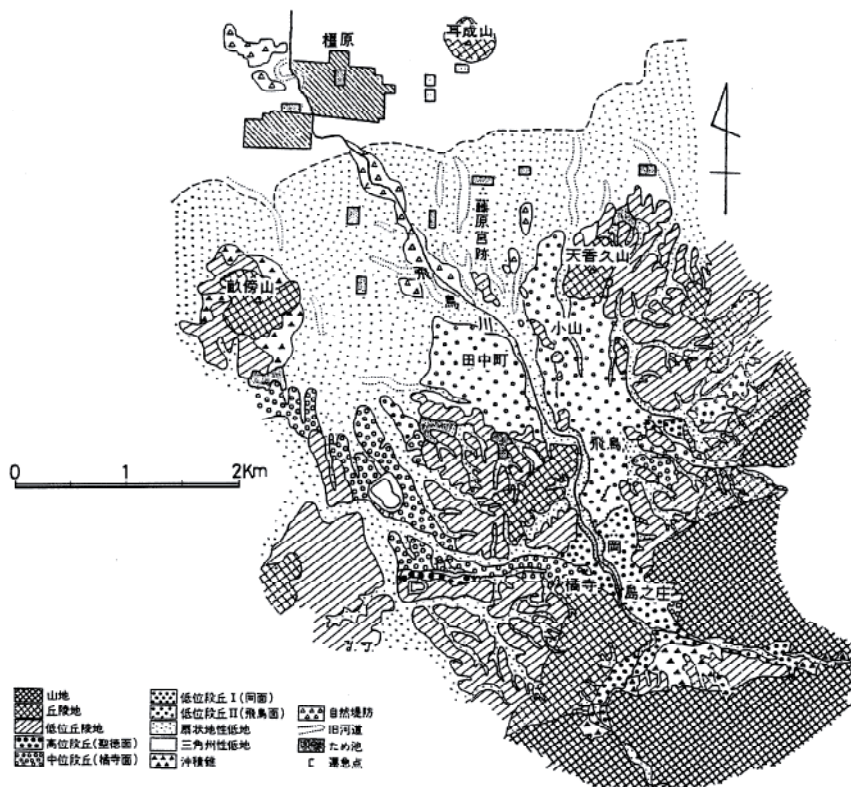
## 第2章 飛鳥地域の測量調査

### 第1節 地理的・歴史的環境

#### 【地理的環境】

明日香村は奈良盆地の南端に位置しており、背後には龍門山地が連なっている。龍門山地は奈良盆地と吉野山地を二分する位置にあり、中央構造線にそって吉野川が西流している。吉野川は下流域の和歌山県に入ると紀ノ川と称されている。龍門山地は奈良県のほぼ中央を東西に伸びており、奈良盆地と吉野山地とを繋ぐ幹線道は現在では芦原峠(芦原トンネル)となっているが古代では下ツ道から続く、巨勢路(紀路)や宮滝へと続く芋ヶ峠がありこれらの幹線道は村内を貫いており交通の要衝であったことが窺える。龍門山地は龍門岳(904m)を主峰にして、北に熊ヶ岳(904m)、経ヶ塚山(889m)、音羽山(801m)が連なり、東には多武峰の御破裂山(619m)を、西に高取山(583m)を配している。明日香村は御破裂山、高取山から派生した樹枝状に伸びた低位丘陵に抱かれた地域に位置している。

明日香村内の主要河川は南東から村内を縦断するように一級河川の飛鳥川が、西には高取川があり、それぞれ北流している。飛鳥川は多武峰と高取山から連なる芋ヶ峠、竜在峠付近に源を発している。途中、冬野川や唯称寺川と合流し、甘樫丘の東方で流れを北西に屈曲させ北流を続けていく。一方、高取川には桧前盆地を流れる桧前川が注ぎ込んでいる。桧前盆地は標高100mの等高線に囲まれた1km四方の小氾濫原の支谷に形成されており、西側には幹線道の下ツ道が接している。高取川の西方にある貝吹山から伸びる尾根筋の裾部には高市郡と葛城郡との郡界となる曾我川が北流しており、大字寺崎付近で越峠付近から伸びる前川が曾我川に流れ込んでいる。



第1図 明日香村周辺地質図

## 【歴史的環境】

### 〈縄文時代〉

飛鳥地域は飛鳥川と高取川を中心に肥沃な段丘面が形成され、ここを基軸として縄文時代から人類の生活の営みを知ることができる。まず、高取川流域では縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土した松前脇田遺跡をはじめとして、飛鳥川流域では飛鳥池遺跡で草創期の有茎尖頭器と木の葉形尖頭器が出土している。中期～晩期にかけては稲淵ムガンダ遺跡・坂田寺下層遺跡、島庄遺跡・飛鳥京下層遺跡・大官大寺下層遺跡等が存在し、集石遺構や竪穴式住居、土器棺などが検出されている。

### 〈弥生時代〉

弥生時代になると飛鳥川流域では飛鳥京下層遺跡(岡遺跡)(前期～後期)・山田道遺跡(中期)があり、島庄遺跡では中期の多角形プランを有した竪穴住居が検出されている。冬野川の上流域でV様式系甕が出土したとされており、周辺に集落が存在していた可能性がある。高取川流域では御園アライ遺跡(中期)で土坑などが検出されている。そして、飛鳥時代前夜となる古墳時代が始まる。

### 〈古墳時代〉

飛鳥地域の古墳時代については現段階ではまとまった遺跡は確認されていない。そういった中であって坂田寺下層遺跡や島庄遺跡、飛鳥京下層遺跡、水落遺跡、大官大寺下層遺跡等で6世紀前半～後半にかけての竪穴住居等が数棟検出されている。また東橋遺跡や島庄遺跡、川原寺下層遺跡、甘樫丘東麓遺跡、古宮遺跡、上ノ井手遺跡、山田道下層遺跡、阿部山遺跡群等でも竪穴住居や古式土師器、韓式系土器、滑石製玉類や土坑等が検出されている。高取川流域では御園アライ遺跡や松前タバタ遺跡で竪穴式住居や古式土師器が検出されている。飛鳥川流域では右岸の段丘上を中心に縄文時代から人々が生活を営んできたが、6世紀末に飛鳥真神原に飛鳥寺が建立されて以降、寺院や宮殿が立ち並ぶようになる。飛鳥京周辺でも酒船石遺跡や雷丘、甘樫丘等で形象埴輪や普通円筒が出土しており、宮殿造営に伴って削平、消滅した古墳が多く存在していたことがわかる。さらに飛鳥川の支流、冬野川流域には横穴式石室を主体とした約200基を超える細川谷古墳群が展開している。群内には緑泥石片岩の箱式石棺を内蔵した堂ノ前塚古墳や戒成組田古墳、穹窿状横穴式石室を有しミニチュア炊飯具等が出土した上5号墳、石材の一部に切石を用いた打上古墳など特徴のある古墳が多く分布している。また冬野川下流域には一辺約50mの方墳の石舞台古墳が存在し、対岸には都塚古墳や塚本古墳など家形石棺を有した6世紀後半から7世紀初頭にかけての古墳が築かれている。その他、寺川の支流、中の川の上流部には八釣・東山古墳群が展開しており、多くの馬具やガラス玉等が出土している。また曾我川の支流、前川の上流部では6世紀中頃に造営された真弓鐘子塚古墳がある。真弓鐘子塚古墳は玄室の北側に奥室を有し、玄室床面積は石舞台古墳をしのぶ規模であり、石室内からはミニチュア炊飯具をはじめ銀象嵌刀装具、玉類、金銅製馬具、そして獣面を模った獣面飾金具などが出土している。前川の右岸ではミニチュア炊飯具等が出土した与楽古墳群など貝吹山(標高210m)の南側斜面には数百基の古墳が展開し、左岸にあるスズミ1号墳からもミ



1. 岩屋山古墳 2. 真弓ワダ古墳 3. 小谷古墳 4. 益田岩船 5. 沼山古墳 6. 牽牛子塚古墳 7. 越塚御門古墳 8. 真弓籬子塚古墳 9. 与楽古墳群
10. スズミ1号墳 11. スズミ2号墳 12. カツヤママ古墳 13. マルコ山古墳 14. 真弓テラノマエ古墳 15. 佐田遺跡群 16. 東明神古墳
17. 佐田2号墳 18. 佐田1号墳 19. 出口山古墳 20. 森カシタニ遺跡 21. 森カシタニ塚古墳 22. 向山1号墳 23. 薩摩遺跡 24. 松山呑谷古墳
25. 清水谷遺跡 26. ホラント遺跡 27. 阿部山遺跡群 28. 稲村山古墳 29. 観覚寺遺跡 30. キトラ古墳 31. 阿部山廃寺 32. 吳原寺跡
33. 檜前門田遺跡 34. 檜前遺跡群 35. 檜隈寺跡 36. 坂ノ山古墳群 37. 檜前上山遺跡 38. 御園チシヤイ遺跡・御園アリエイ遺跡 39. 塚穴古墳
40. 高松塚古墳 41. 火振山古墳 42. 中尾山古墳 43. 平田キタガワ遺跡 44. 梅山古墳 45. カナツカ古墳 46. 鬼の俣・雪隠古墳
47. 野口王墓古墳 48. 川原下ノ茶屋遺跡 49. 龜石 50. 西橋遺跡 51. 定林寺跡 52. 菖蒲池古墳 53. 五条野宮ヶ原1・2号墳 54. 五条野向イ古墳
55. 五条野城脇古墳 56. 五条野内垣内古墳 57. 植山古墳 58. 五条野丸山古墳 59. 軽寺跡 60. 石川精舎 61. 檀原遺跡 62. 田中廃寺
63. 和田廃寺 64. 雷丘北方遺跡 65. 大官大寺跡 66. カセヤ塚古墳 67. 庚申塚古墳 68. 山田寺跡 69. 上の井手遺跡 70. 奥山リウケ遺跡
71. 奥山久米寺跡 72. 雷丘東方遺跡 73. 雷丘 74. 豊浦寺跡 75. 石神遺跡 76. 飛鳥水落遺跡 77. 飛鳥寺跡 78. 飛鳥東垣内遺跡 79. 竹田遺跡
80. 小原宮ノウシロ遺跡 81. 八釣・東山古墳群 82. 東山マキド遺跡 83. 金鳥塚古墳 84. 飛鳥池工房遺跡 85. 酒船石遺跡 86. 飛鳥京跡
87. 飛鳥京跡苑池遺構 88. 甘樫丘東麓遺跡 89. 川原寺裏山遺跡 90. 川原寺跡 91. 橋寺跡 92. 東橋遺跡 93. 島庄遺跡 94. 石舞台1~4号墳
95. 石舞台古墳 96. 馬場頭古墳群 97. 打上古墳 98. 都塚古墳 99. 戎成組田古墳 100. 坂田寺跡 101. 飛鳥稻淵宮殿跡 102. 塚本古墳
103. 朝風廃寺 104. 稲淵ムカダ遺跡

第2図 飛鳥地域周辺遺跡分布図 (1 : 25000)

ニチュア炊飯具が出土するなど、前川を中心とした周辺の高墳群は東漢氏の奥津城と考えられている。また高取川流域では方格規矩鏡や四獣形鏡等が出土した向山1号墳やミニチュア炊飯具や釵子が出土した坂ノ山古墳群や阿部山遺跡群、銀製釧などが出土した稲村山古墳などが点在している。隣接してある観音寺遺跡や清水谷遺跡、薩摩遺跡からは大壁建物やオンドル遺構、方形池が検出されるなど檜隈地域周辺には多くの渡来系氏族が蕃居していたことが窺える。

#### 〈飛鳥時代〉

飛鳥時代の7世紀に入ると高取川左岸(真弓丘陵)から右岸(桧前盆地)にかけて多くの終末期古墳が築かれるようになる。真弓から越智丘陵では精美な横穴式石室を有した岩屋山古墳や凝灰岩の巨石を刳り貫いた牽牛子塚古墳や石英閃緑岩の刳り貫き式横口式石槨を有した越塚御門古墳などが存在している。さらに南方には多角形を呈したマルコ山古墳や凝灰岩の切石を積み上げた束明神古墳、蔵骨器を内蔵したとされる出口山古墳などが点在している。また結晶片岩の磚積石室で棺台を有したカヅマヤマ古墳や真弓テラノマエ古墳が点在している。真弓テラノマエ古墳では棺台と玄室床面に平瓦が使用されている。桧前盆地になると梅山古墳からカナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓古墳が東西に並んで築かれており、南方には八角墳で火葬墓の中尾山古墳や極彩色の壁画で有名な高松塚古墳が存在している。北方の甘樫丘南側斜面では榛原石を段状に積み上げた小山田遺跡が位置し、さらに高松塚古墳から1.5km南には四神図や天文図、十二支像が確認されたキトラ古墳がある。

飛鳥盆地では蘇我氏の氏寺の飛鳥寺をはじめ、豊浦寺や山田寺、奥山久米寺、坂田寺、定林寺などの多くの古代寺院が築かれる。国家寺院としては百濟大寺(吉備池廃寺)が造営され、その法灯は高市大寺、大官大寺、奈良大安寺へと繋がれていく。その他、斉明天皇の菩提を弔うために川原宮の跡地に川原寺が造営される。また宮殿も乙巳の変の舞台となった飛鳥板蓋宮や斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮や苑池などが造営される。これらの宮殿に近接して酒船石遺跡や飛鳥池遺跡がある。酒船石遺跡では酒船石を中心に丘陵を藤原層群豊田累層の凝灰岩質細粒砂岩を使用した石垣が約700mにわたって巡っており、また丘陵の北側裾部からは亀形石造物を中心とした導水施設と石敷き広場が検出されるなど二槻宮との関連が注目されている。また石上山石を運んだ狂心渠と考えられる幅約10mの運河跡が飛鳥東垣内遺跡で検出されている。この運河の上流に約1kmにわたって続いており、上流部には飛鳥池工房遺跡が存在する。飛鳥池工房遺跡は7～8世紀にかけての官営工房で炉跡や石組み溝、掘立柱建物の遺構の他、金属・ガラス玉・鋳型・大量の木簡、また鋳造貨幣では和同開珎より遡るとされる「富本銭」が出土している。この他、飛鳥東方の丘陵地には小原シウロ遺跡や東山マキド遺跡、竹田遺跡があり、7世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また橘寺西方にある西橘遺跡では7世紀後半～末にかけての庇付掘立柱建物や大量の木簡が出土している。宮殿域の中心部から離れた桧前盆地では東漢氏の氏寺とされる檜隈寺や呉原寺等の寺院が建立され、周辺の檜前大田遺跡では大壁状遺構や7世紀代の掘立柱建物群が検出されている。

#### 〈奈良時代以降〉

奈良時代以降の飛鳥地域の様相については西暦694年、政治の舞台は飛鳥京から藤原京へ、



更に藤原京から平城京に移るようになると飛鳥地域では顕著な槻木遺構はあまり認められなくなる。一方、雷丘東方遺跡では井戸枠の年輪年代から淳仁朝の「小治田宮」が奈良から平安時代にかけて存続していたことも明らかとなっている。阿部山遺跡群では11～13世紀代にかけての白磁碗を使用した火葬墓や一辺約4mの墳丘をもつ木棺墓が検出されており、棺内から龍泉窯系青磁碗等が出土している。中世以降になると橘寺や川原寺、飛鳥寺など飛鳥の景観を形成していた堂塔伽藍が落雷等により相次いで焼失し、飛鳥の風景が大きく変貌していく。南北朝期に越智氏が越智城を構え、飛鳥周辺にも貝吹山城や佐田城が築かれるようになる。また越智氏は高取山に逃げ城的な存在の高取城を築き、その後本多氏、植村氏によって改修を重ねながら高取藩の居城として幕末まで存続していく。高取城の石垣の一部には古墳の石材を転用しており、この時期飛鳥地域の後・終末期古墳が破壊されていたことが推測できる。飛鳥盆地には砦的性格をもつ奥山城や飛鳥城、雷城や岡城、そして野口城や貝吹城、観覚寺城が築かれるようになる。近世になると伊勢や吉野などの寺社を往来する旅人の案内として分岐点に道標が設置される。西国七番札所である岡寺(龍蓋寺)の門前町が賑わいをみせ、本居宣長も岡の薬屋で一夜を過ごしており、今日もなお古い町並みは往時を偲ばせてくれる。 (西光慎治)

## 第2節 岩屋山古墳測量調査報告

### I. はじめに

岩屋山古墳は奈良県高市郡明日香村大字越小字岩屋516-2番地に所在する終末期古墳である。岩屋山古墳についてはその精微な石室を有する古墳として有名な飛鳥の終末期古墳の一つである。江戸時代の1854（嘉永7）年に刊行された『聖跡圖志』の中に「岩屋 真弓岡陵皇極祖母ノ陵カ」とあり、石室が開口している様子が描かれている。1893（明治23）年に著された野淵龍潜の『大和國古墳墓取調書』の中で「高市郡阪合村大字越二在り字岩山ト云フ其塚壮大ニシテ一見尋常ナラザルヲ知ル南方ニ石窟ノ口廣ク開ケリ羨道三十尺玄室十五尺餘アリ其構造ヤ宏壯堅牢ニシテ四壁皆切石を齧タリ村人ノ傳唱ニ因レバ武内宿弥ノ子韓宿弥ノ殯葬ノ處ニシテ後葛上郡葛村大字稲宿ヘ改葬セシモ尚其靈ヲ祀リテ村社トナセリ今ノ許勢津神社是ナリ韓宿弥ハ武内ノ五男ナル故此社ヲ五郎神社トモ称ス村名ノ越ハ巨勢ノ訛傳ニシテ往古ノ書類ニハ巨勢ト記セリ云々依テ武内ノ傳ニ考フルニ七子アリ即チ羽田矢代宿弥巨勢小柄宿弥蘇我石川宿弥平群木兎宿弥木角宿弥葛城長江津彦若子宿弥ナリ而シテ謂フ所ノ韓宿弥ハ即チ許勢小柄宿弥ニシテ古事記ノ順序ニ依レハ二男ノ如シト雖ドモ三代実録卷五ノ文ニ田レバ第五男巨勢男韓宿弥ト書セリ又伴信友ノ神名帳考証ニハ此村社ノ祭神ヲ許勢小柄宿弥トセリ又夕順ノ和名抄ニハ高市郡巨勢トアリ此等ヲ以テ考フレハ村民ノ傳唱モ亦故ナキニアラス依テ本塚ハ男韓宿弥ノ殯處ト考フ但此人ノ官職ヲ詳シテ能ハサルヲ以テ其構造ノ當否ヲ甄別スルニ由ナシ」と記されている。」と記されており、石室の計測や伝承、特に被葬者についても言及している。1897（明治30）年にはウィリアム・ゴーランドの「The Dolmens and Burial Mounds in Japan 日本のドルメンと埋葬墳」の中で、岩屋山古墳について次のように紹介している。「もっともすばらしい、驚嘆するような切り出し石の巨石構造の例は、舌を巻くほど見事な仕上げと、石を完璧に組みあわせてある点で日本中のどれ一つとして及ばない越にあるドルメンで、これは今述べた所（小谷古墳）から南東へマイルほどの場所にある。そのドルメンは二段丘の円墳内にあるが、その一方の側面は村の宅地用にずいぶんと削りとられ、他の側は畑に占拠されている。元来の墳丘は直径一六〇フィート以下ではなかった。その高さは三六フィート。ドルメンには上の段丘から入れるが、その上段丘はドルメンの床と同じ高さにある。全長は内部が四四フィートだが、羨道はそれよりもさらに天井なしで七フィート延びている。室は一五フィート、幅八フィート一〇インチ、高さ八フィート一〇インチ、羨道は長さ三六フィート七インチ、幅六フィート五インチ、室の入口では高さ五フィート六インチである。室から一七フィート一〇インチ離れた所に、八インチのステップが羨道の天井にあって、これは粗雑な石のドルメンでも見られるもので、そのステップには室に近づけないよう一種の防御法が施してあるが、それでも儀式を行う必要上、羨道の外部に内側に入れるだけの十分な空間を残している。花崗岩の石は、ドルメンの内部では実にきれいに切って磨いてあるが、外側は通例のように自然のままである。室の天井も同じように切った巨大な塊石一つでできていて、長さ一四フィート六インチ、幅一フィート六インチある。このドルメンはいかなる民間伝承も、またいかなる皇族や豪族の名も付いていない。村人の話では、このドルメンにはかつて石棺があったが土器もその他の副葬品も出土したとは聞いていないそうである。それは現在、ある農夫の穀物倉になっていて、ときどき掃除したために、ずいぶんと綿密で入念な調査をしたけれども年代がわかる

手掛かりは何一つなかった。その、見事に仕上げた石工技術は、ドルメン時代初期をはるかに経てからの築造であることを示している。なぜなら、初期時代の粗雑なドルメンからこれほどの完璧な構造になるには数世紀が必要だったに違いなく、だから、これはドルメンの築造が最盛期に達したところからあまり隔たっていないと思える。」とあり、ゴーランドがはじめて、本格的に岩屋山古墳を調査した研究者であったことがわかる。1913（大正2）年には佐藤小吉の『奈良縣史蹟調査會報告書第一回』が刊行され「所在 高市郡坂合村大字越字岩屋山ニアリ、方向正南ヨリ稍東ニ傾キ、同村ノ舊家ニシテ、現ニ區長ナル松本文三郎氏ノ所有ニ係ル。構造 四壁、孰モ立派ナル花崗岩ノ切石ヲ以テ整ミ、其ノ規模ノ宏壯ナル、彼ノ磯城郡安部村安部文殊堂ノ奥院ノ古墳ニ匹敵セル好一對ナルヘシ。別紙ニ示セル如ク、羨道ノ長サ約二丈八尺五寸、幅七八尺ニテ、天井ハ五枚ノ石ヨリナリ、玄室ノ長一丈五尺、幅八尺八寸餘、高八尺五寸餘、天井ハ一枚石ヲ用ヒタリ。但石棺ヲ見ス。傳説 世ニ此ノ墳ヲ以テ、巨勢小柄ノモノトス。今此ノ墳ニ近ク五郎宮アリ、傳ヘ云フ、其ノ祭り神ハ、即チ巨勢ノ小柄ニシテ、武内宿弥ノ五男ナルヲ以シカ云えヘルナリ、小柄ノ曾孫男人ニ至ルマテ、此ノ地ヲ領セシヲ、男人功ヲ以テ地ヲ葛城ニ賜リ、其ノ地ヲ後ニ古瀬村ト云ヒ、小柄ヲモ彼ノ地ニ改メ葬リヌ。即チ今ノ葛上郡稲宿村新宮山ニシテ、其ノ故墳ハ、即チ此ノ岩屋山ナリト。（五郎宮碑文ニ據ル）延喜式ヲ案スルニ、式内許世都比古命神社アリ、名所圖繪ニ、越村ニアリトシ、今五老神ト稱ストアルハ、此ノ五郎宮ナルヘク、伴信友モ、其ノ著神名帳考證ニ、巨勢氏ノ祖神トセリ、又此ノ社ヲ指セルモノナルヘシ、今併セ記シテ、後日ノ資料ニ供ス。」と記されている。1915（大正4）年には『高市郡志料』が刊行され、その中で「越の岩屋山古墳は阪合村大字越字岩屋山に在り、中街道豊年橋を西に渡り、約二丁許、村落の入口人家の北方に在りて、高凡二間根廻三十八間許の獨立古墳なり。古來大字區長松本某の私有に屬し雜木林となれり。塚口は南に向ひて開けたり。大和志は皇極天皇皇祖母陵に擬し益田池碑文の大墓聳南即此と記し聖跡圖志も亦之を書き皇祖母陵にあらさるかとい云へり。志而して皇祖吉備姫王の御墓は今阪合村大字平田なる欽明天皇檜隈阪合陵の傍にあり。石槨は玄室と羨道との二部より成り、玄室は奥行凡一丈五尺幅凡八尺八寸高凡八尺五寸天井は一枚石なり。但し上部は漸次内方に縮まるを以て天井石の面積も亦縮まるものの如く側壁左右各下三枚上二枚奥壁上下各一枚積み重ねたり。羨道は長さ二丈三尺五寸幅入口に於て七尺、玄室に接する所に於いて六尺四寸、高五尺五寸、天井は五箇の巨石を用ひ二段となりて其の差六寸あり、側壁も亦五箇の大石を列ね尚ほ孔外に各一箇を配置せり。何れも花崗岩質片麻岩にして、磨礪精巧なる巨石を用ひ、構造の精巧なること他に多く類を見ざる所なりとす。窟外木牌を掲げて巨勢小柄宿弥の墓たるの傳説を記せり、されと據る所なし。蓋し當古墳は皇祖母吉備姫王真弓墓にして延喜式にある檜隈墓はその後改葬せしもの歟。」と記されている。1923（大正12）年に刊行された『高市郡古墳誌』には「中街道豊年橋を西に渡って約二町許、村落の入口人家の北方にあって、高さ凡そ五間、長径十四間、短径九間、面積約三畝七歩許の獨立古墳である。古來大字區長松本善三郎の私有に屬し雜木林となつて居る。羨道は南に開けて低い丘陵にある圓墳である。現今南東北の三方は雜木林で少々自然の状態を存して居るが、西方は削りとられて絶壁をなし、羨道部の所は殆ど石材の所まで人家に接して居る。玄室及び羨道は完全に現存して居る。羨道の入口が廣濶であるから玄室内まで光線の射入十分であつて、槨ないり現状を窺知する事容易なるは稀に見る所であらう。石



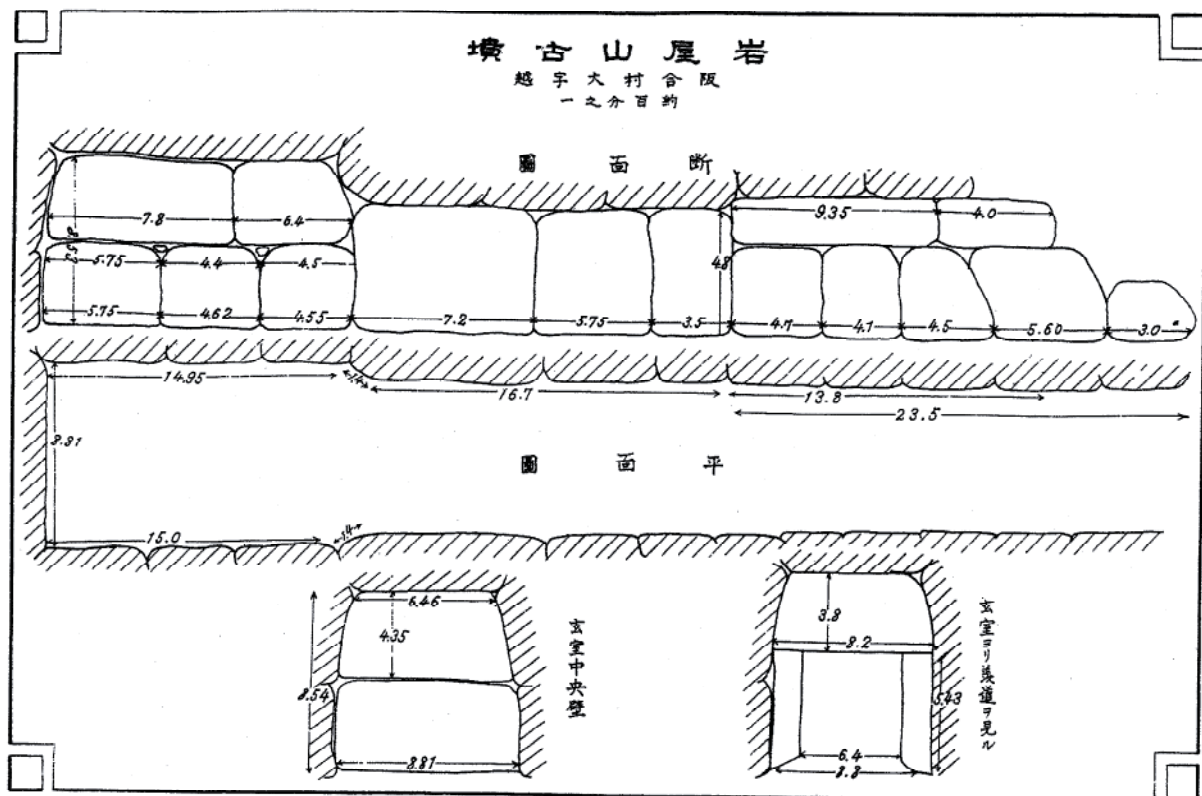
槨は玄室と羨道との二部から成り玄室は奥行凡そ一丈四尺五寸、幅八尺八寸、高さは八尺九寸、天井は一枚石である。但し上部は漸次内方に縮小して居るから、天井石の面積も亦縮まって居るが、側壁左右各下段三枚上段二枚奥壁各一枚積重ねてある。羨道部は長さ二丈三尺二寸、幅入口に於て六尺四寸、玄室に接する所に於て五尺四寸、両壁は各九枚の巨石を用ひ天井は五枚の巨石にして二段となり其差六寸ある。羨道部天井石最前端のものに、横に一線の溝が穿つてある。蓋し羨門部の密閉装置がしてあつたものと思はれる。尚孔外に各一個の石を配置されてある。何れも花崗岩質片麻岩であつて磨礫精巧なる巨石を用ひ、構造の精巧なることは他に多く、類を見ざる所である。此の古墳についての傳説は二つあつて一つは皇極天皇御母吉備姫王檀丘墓に擬し他は巨勢雄柄宿弥墓と傳へて居る。若し前者とすると式に檜隈墓とあるから構成改葬したものであろう。」と記されている。1935（昭和10）年には日本古文化研究所から『近畿地方古墳墓の調査一』が刊行され、その中で「此の古墳は大和國高市郡阪合村大字越小字岩屋山の第五一六番地にあつて、其の字名から古く石室の開口していたことを示すものである。墳の主體である處の石室が切石から成る壯麗なものである点で、早くから世人の注意に上つて、同國磯城郡阿部文殊院西古墳のそれと並び稱せられ、従つて關係の記述も少なくない。是等の中でガウランド教授の「日本に於ける石室と高塚」なる論文に載つた墳形の實測圖と其の記述とは最も早くても正確なものとする。佐藤小吉氏が大正二年に『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第一冊に発表した「岩屋山古墳」なる報告は主として石室に就いて書いたもので、これは其の後の『奈良縣高市郡志料』『奈良縣高市郡古墳誌』等の據る所となつた重要な文献であるが、今日から見れば、種々の点に不備があり、改めて正確なる記載をなすの要を認める。これが吾々の本古墳を新たに調査するに至つた所以である。位置と外形 岩屋山古墳は越の部落の東北隅に近接して、大軌吉野線の橘寺前停留所の西北約一町にある。其の地は飛鳥平野の南に起伏する山丘地帯のうち、西から延びて檜前川の流れに沿ふた谷に終る一の臺地の端に當つて居り、北方が開けて三山を眺むべく、南方また前記の川の上流に對して一の景勝をなしている。『高市郡古墳誌』に依ると、塚の面積は約三畝七歩あつて、古くから越の區長松本善三郎氏の所有地として保存されているとあるが吾々の調査の際、近年それが高市村長脇本熊次郎氏の有に歸したと言ふことを聞いた。さて現在櫛の密生した此の塚の外形は、東半の部分は極めてよく遺存しているが、西半は何時の世にか破壊せられて畑地と化し、一隅に人家が建ち等して、封土が崖状になつて形態を損することが著しい。而して此の南北に崖状をした現存封土の西側に接して南向の石室が開口している。右の現存封土は圖版第四の吾々の實測図に見る如く、東・北・南の三方で高さ十尺内外を測る第一段の上に高い第二段たる主丘を築いたものであつて、第二段の下邊は比較的急な傾斜を呈していることが知られる。此の封土は南北の長さが基底で約百三十尺、上段の主丘の下部で七十五六尺の間にあり、高さは通じて三十尺に近い。東西の方は封土の西半が削られた為に前者と違つているが、破壊せられた部分を復元すると第四圖の如くなつて、略同じ大きさが出て来るから、本来二段築成の整美な丸塚であつて、規模もまた相當大きいことが認められるのである。右の封土の表面は雜草に覆はれて詳細に調べることは出来なかつたが、時に小石を見る外、特に石を葺いた様な形跡がなく、又埴輪圓筒片も見當らず、断面を表はした西半の部分でも一切兩者のあつた風がなかつた。従つて本来特別の外部的な設備を加へなかつたと見るべきであらう。石室の構造 大形で完好な二段築成の圓墳



第5図 岩屋山古墳位置図 (明治年間)



第6図 聖跡圖誌 (嘉永7 (1854) 年)



第7図 岩屋山古墳 (『高市郡志料』)

であると言ふ以外、特に著しい特異点とてはない外形に對して、本遺跡を特色附ける處の石室は前段既に説き及んだ如く、現存封土の西邊に偏して南側に戸口を開いて遺存するものである。但し右の偏在は封土の西半が削り取られた結果であつて、本来は封土の中央の南面に位置していたに相違なく、實際玄室は略ぼ現存封土の頂部下にあり、前の長い羨道を経て、天井石の端が主丘の下邊に来る様になつてゐること實測圖に見る如く、其處に封土と内部主体主體との正しい關係が表はれてゐる。此の石室が花崗岩の巨大な切石を用ひて築成せられた整美な式であることは、ここに更めて繰返すまでもないが、平面形の示すところ、玄室は長十五尺餘幅九尺に近く、兩者の比が五對三と言ふ如何にも頃合ひな矩形をして居り、其の前に兩側で各一尺二三寸宛幅を狭めた羨道があり、これは長さ四十尺に達する長大なもので、戸口に至るに従つて漸次幅が廣くなつてゐる。次に右の平面形の側壁は通じて加工の度の高い滑かな面をした巨石を以て架構、而も左右均整になつてゐる点が先づ注意せらる。即ち玄室にあつては高さ八尺五寸内外の壁面が二段から成り、下邊は左右壁各三枚、奥壁一枚を並列し、其の上に左右各二枚、奥一枚の巨石を積み重ねたもので、後者は前者よりも上邊がより斜に前に出ていて、これが羨道との界をなす天井石の側面の同じ加工と併せて、玄室の内部を恰も家屋の内側に似たものとしてゐるし、更に是等の用材並に同部を覆ふた一枚の巨大な天井石は通じて面が直でなく、緩かな内反りの曲線を示す様に加工せられてあつて、其の上に軟味を持たせてゐるのは特記すべき点としよう。羨道は玄室につづく部分約十七尺は左右共に高さ六尺内外の一枚石の並列で、天井石と共に各三枚から成るが、それから外は天井部が少しく高くなつて、幅の開きと對應して居り、側石は一部分二段積みの處があつて、若干の変化を示してゐる。而も用材の稍々不揃である同部から、天井石のない先端に至るまで、すべて左右均勢である点はよく設計者の入念さを物語るものと言ふ可く、また如上の細部を通じて羨道の除々に奥へ狭まつて行く所に本石室の死者の永久の奥城たる神秘的な趣を加へるものがある。右の架構と関連して、現在玄室をはじめ羨道の一部の石材の合せ目にセメント様の接合材を施したことが注意せらるが、これは手法、其他から觀て開口後保存上加へたものとするに殆んど疑問はない。以上石室の構造に次いで、なほ注意を惹く点は、其の羨道の戸口の示す細部の状態とする。既に挙げた如く、此の部分では羨道の側石は現存天井石の端からなほ十尺以上もつづいていて、率然として對すると右の部分の覆ふた天井石が失はれた様にも思はれるが、現在の先端の天井石を見ると、正面を通じて、下部に幅五寸の面取りが施されているのみならず、それから上面が斜めに恰も屋根の一部をなす様に加工した形跡が極めて顯著であり、本来外方に露はれたことを察せしめるものがある。かかる加工は他と土中で接合する場合に不必要であることは言ふまでもないから、同石材は自ら天井石として普通のものとは違つた意味を持ったものと解す可きで、其の前方にも他の天井石があつたとはなし難い。而して此の場合右の石の上面の傾斜がそれにつづく封土の「スロープ」に合致してゐることと、他方石の下面に於いて端から七八寸の處に幅二寸、深さ七八分の一直線の切込みのあることとは、進んで同石が本来の戸口の楣石に當り、それから少し入つた所に扉を加へたとする推測を加へしめるに役立つものとする。ここで、左右の側石が右の天井石から前へ漸次高さを減じて、略ぼ封土の流れと一致してゐる点も、また前者と結びつけて理解せられることになるであらう。果たして然らば本石室の戸口は營造阿の當初から封土中に埋没せしめず、外側に露はす様に設計したものと見る可きで従来不問に附された横穴

式石室の营造に関する一の事実が新しく考へられ、それが同時に葬送の事実と連関して別個の考察を導くことにもなって来る。本古墳に就いては其の被葬者就いて二つの傳をきくものであるが、固より確實なる據所などなく、石室の開口が古くて異物の有無など尋ねべくもない。併し壯麗なる其の石室が幸に保存せられ、戸口に於いて如上の学術上興味ある細部を遺存するのは稀有の例とす可く、此の点から吾々は本墳の将来の保存に就いて當局の考慮を望むものである。」と記されている。1967（昭和42）年には白石太一郎の「岩屋山古墳の横穴式石室について」の中で、岩屋山古墳の石室を指標とするタイプを「岩屋山式」と設定して、同じ規格に基づいて設計された古墳としてムネサカ1号墳（桜井市）をあげ、高麗尺による規格を検討されている。1973（昭和48）年には菅谷文則・河上邦彦による「岩屋山古墳測量調査報告」が発表され、岩屋山古墳の詳細な実測図が提示されると共に、一辺約54mの三段築成の方墳である可能性が示されている。1976（昭和51）年には猪熊兼勝「飛鳥時代墓室の系譜」では岩屋山古墳を「切石積み横穴式石室」のタイプとし、羨道天井石先端の溝について板状の扉石で閉塞するこれまでの閉塞法とは異なる新技法を採用しているとされた。1978（昭和53年）には網干善教らによって史跡環境整備事業の一環として発掘調査が実施され、墳丘は一辺約40m、高さ約12mの二段築成で、埋葬施設は全長約18mの両袖式横穴式石室でることや、床面には幅約55cm、深さ約30～40cmの溝内に礫を充填した暗渠排水溝検出されている。出土遺物から石室は中世以前には開口しており、また二次利用が行われていたことも明らかとなっている。その後、調査成果を受けて環境整備事業が実施され、階段や解説板などが設置されている。1968（昭和43）年5月11日には国史跡に指定されている。平成22～23年にかけて現況を把握することを目的として墳丘と石室の測量調査が行われている（西光・辰巳2011）。平成23年と平成26年には奈良文化財研究所を中心に三次元計測が実施され、三次元計測の多様性と文化財への利活用について検討がなされた（金田・高橋2015）。

## 2. 測量調査報告

### 【墳丘】

岩屋山古墳は高取川左岸の南北に伸びる低位丘陵から東へ派生する三条の尾根の中央に位置している。墳丘は東側で標高98.500～99.250m付近にかけて、幅約3mのテラス面が明瞭に残存することから、二段築成の墳丘であることがわかる。墳丘は埋葬施設を境にして西側半分は大きく削平されており、詳細は不明である。高さについては墳丘の基底部と考えられる標高94.000mから墳頂の標高105.000mまでで11mとなる。墳丘北側の上段裾部の標高101.000mから墳頂までの比高差は4mとなり、南側の上段裾の標高98.500mから墳頂まで6.5mを測る。これによりやや北側が高くなっていることがわかる。下段の高さは墳丘基底部からテラス面の標高98.000mまでで4mとなる。北側はコンクリート壁となっているため、詳細については不明である。墳形については墳丘北東側の標高97.250から98.500mと南東側の標高97.000mから97.750mでコーナー部分が認められる。上段についても北東と南東で同様のコーナーを確認することができる。これらを総合すると下段の一辺が約40m、上段の一辺が約18mとなり、高さ約11mの二段築成の方墳に復元することができる。また、上段裾部の標高98.500mから100.000m付近にかけて屈曲したラインが4ヶ所確認することができる。これらから墳丘





第8図 岩屋山古墳 墳丘測量図

上段は対角長約25mの多角形(八角形)を呈していた可能性も考えられる。その場合、下段は一辺約40mの方形で上段が多角形に復元することができる。(辰巳俊輔)

### 【石室】

埋葬施設は貝吹山周辺で採石できる石英閃緑岩の切石を使用した南に開口する両袖式横穴式石室である。石室規模は現状で全長約17.76m、玄室長は左右各側壁で4.80~4.86m、主軸で4.75mを測る。幅は奥壁2.7m、中央2.7m、袖部2.7mである。高さは2.88~2.93mを測る。羨道は右側壁11.96m、左側壁12.96m、主軸で4.7mとなる。幅は玄門部が1.95m、羨門部が2.05mである。高さについては玄門部で1.65m、羨門部で1.85mを測る。

玄室の壁面は二段積みとなっている。石材は奥壁2石(上下各1石)、左右側壁各5石(上段各2石、下段各3石)から構成されており、二段目の石材は全体的に内傾している。天井石は1枚石を架構している。前壁も一石で内傾している。

羨道部は玄門部から約5m付近までは1石積みで各3石ずつ設置されている。そこから羨門部にかけては二段積みで下段4石上段2石の合計各6石で構成されている。羨門より南側については左右の側壁共に2~3石残存している程度である。羨道の天井部については5石架構されており、側壁の積み方が変わる部分で0.15~0.17m高くなる。羨門部の天井石は墳丘外明示のため墳丘面に合うように斜めに丁寧に加工が行われている。この天井石には先端から約0.23mのところ幅約0.06m、深さ約0.02mの断面がU字状になった溝が穿たれている。石室壁面の石材同士が接する箇所にはモルタルが充填されている。これは昭和の初頃、養蚕を行う倉庫として石室が利用されていた時の産物であり、築造当時の漆喰ではない。石室床面には昭和55年の発掘調査で玄室に長径約1.1m、短径約0.65m、深さ約0.6mの集水穴とそれとを繋ぐ幅約0.55m、深さ0.3~0.4mの暗渠排水構が検出されており、内部には川原石が充填されている。(辰巳俊輔)

### 3. 表採遺物

今回の測量調査では表採遺物等は確認できなかった。

(辰巳俊輔)

#### 【引用・参考文献】

- ウィリアム・ゴランド1877「日本のドルメンと埋葬墳」上田宏範編1981『日本古墳文化論』所収 創元社  
野淵龍潜1893『大和國古墳墓取調書』  
佐藤小吉1913「岩屋山古墳」『奈良縣史蹟勝地調査会報告書』第一回 奈良縣  
高市郡役所1914『高市郡志料』  
高市郡役所編1925『高市郡古墳誌』  
日本古文化研究所1935「大和越岩屋山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』1  
白石太一郎1967「岩屋山古墳の横穴式石室について」『ヒストリア』第49号 大阪歴史学会  
菅谷文則・河上邦彦1973「岩屋山古墳の墳丘測量調査」『青陵』第22号 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館  
猪熊兼勝1976「飛鳥時代墓室の系譜」『奈良国立文化財研究所学報』第28冊 奈良国立文化財研究所

網干善教1980『岩屋山古墳－史跡環境整備事業に伴う事前調査概要－』明日香村

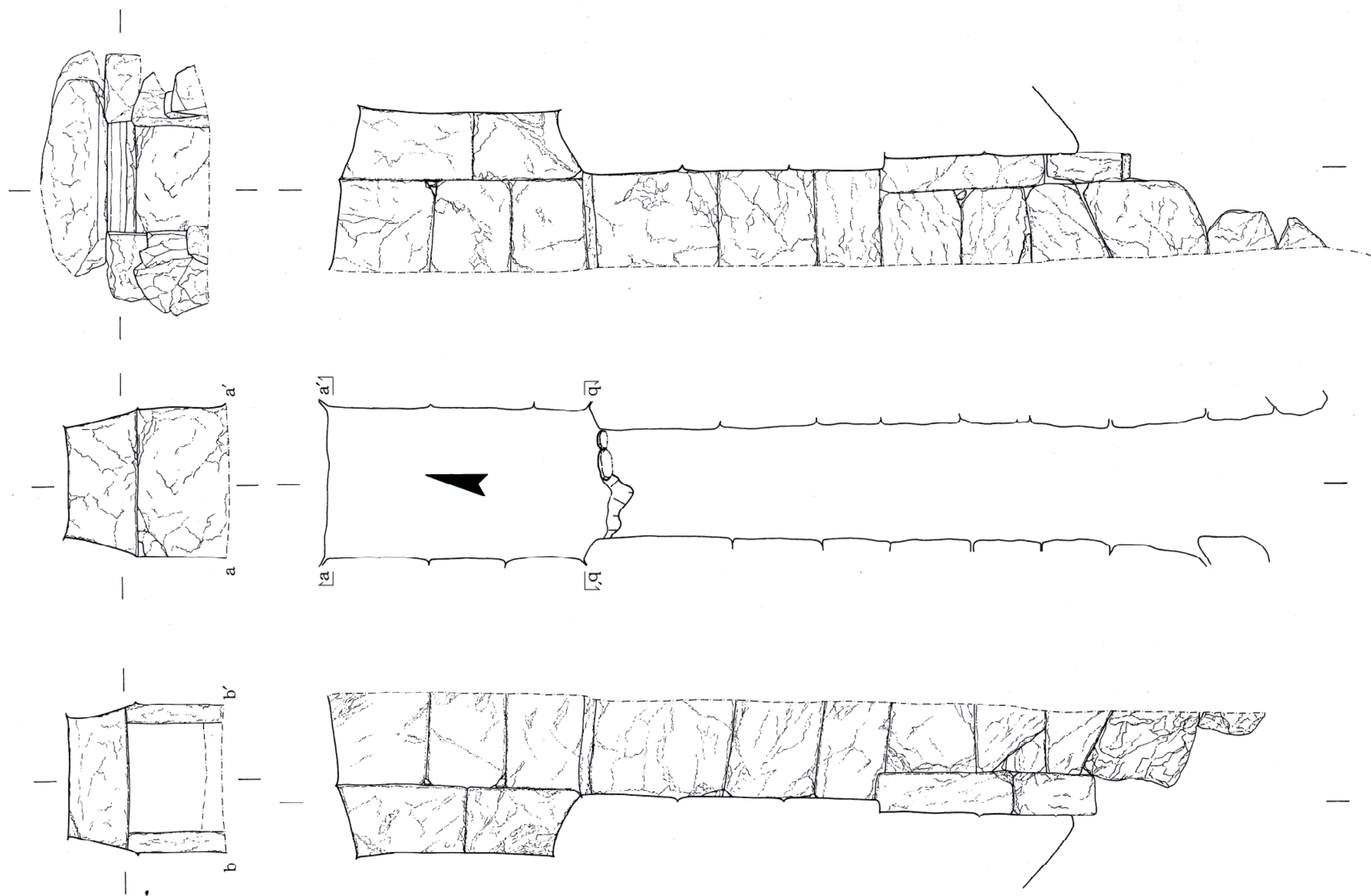
西光慎治2007「ムネサカ1号墳測量調査報告」（『王陵の地域史研究』所収）『明日香村文化財調査研究紀要』第6号 明日香村  
教育委員会

西光慎治・辰巳俊輔2011「岩屋山古墳測量調査報告」（『王陵の地域史研究－飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅴ－』  
所収）『明日香村文化財調査研究紀要』第10号 明日香村教育委員会

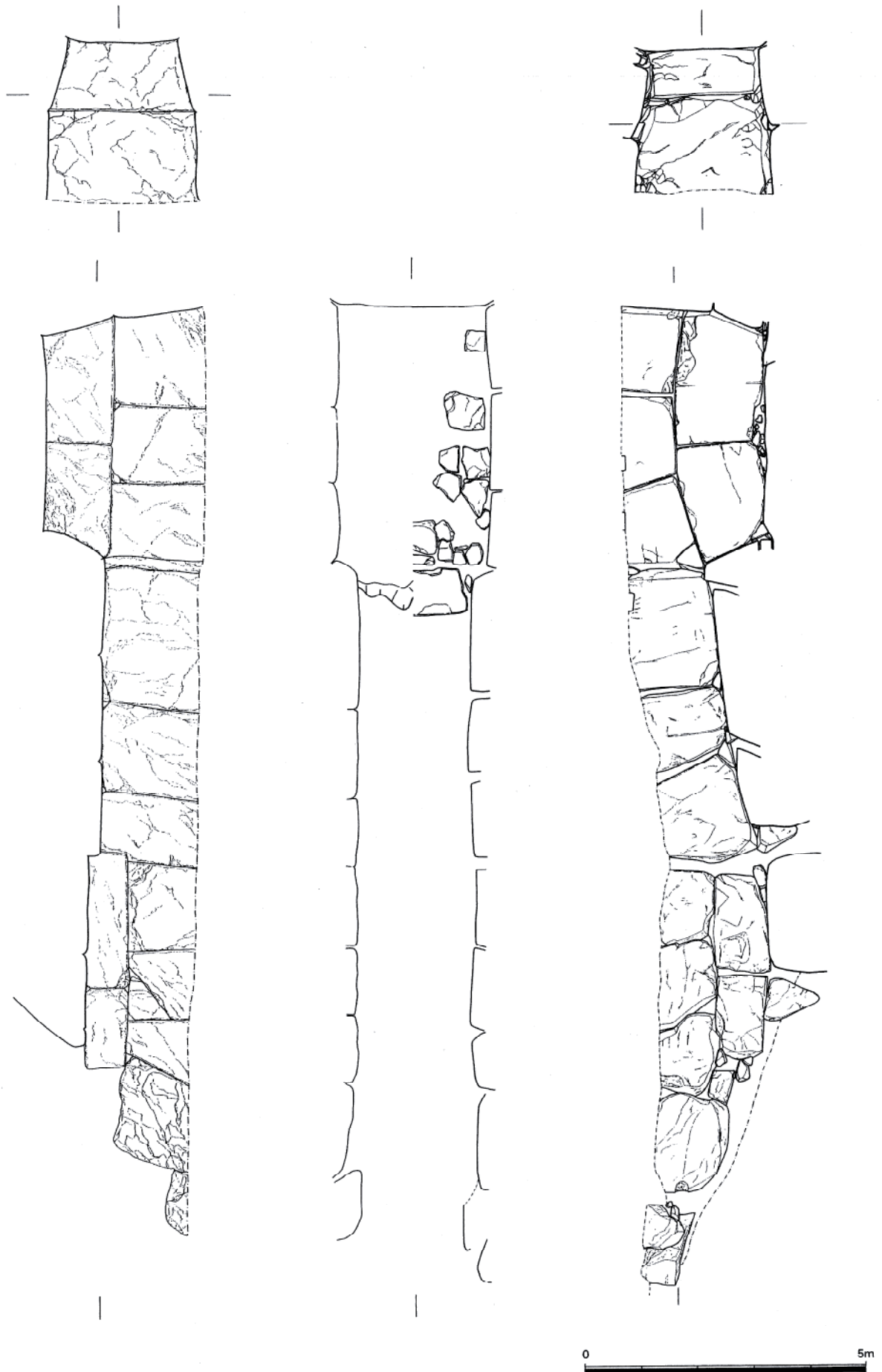
金田明大・高橋幸治2015「岩屋山古墳の三次元計測から－作業の概要と課題－」『明日香村文化財調査研究紀要』第14号  
明日香村教育委員会

#### 付 記

脱稿後、大阪市立大学日本史研究室2016『岩屋山古墳の石室』住考研リーフレットNo.8の管見にふれた。  
本報告ではこれらの成果を生かすことはできなかったが岩屋山古墳の設計寸法や文殊院西古墳、西宮古墳など  
いわゆる「岩屋山式」「岩屋山壘式」の比較検討が行われており、参照されたい。



第9图 岩屋山古墳 石室実測図 (1:80)



第10図 岩屋山古墳・ムネサカ1号墳 石室対照図

### 第3節 平田笠原古墳踏査報告

#### 1. はじめに

平田笠原古墳(別名、將軍塚)は明日香村大字平田小字笠原に所在する古墳状隆起である。この場所は檜隈地域の東端にあたり、周辺には極彩色壁画で有名な高松塚古墳や中尾山古墳など飛鳥を代表する終末期古墳が点在している。平田笠原古墳については地元の伝承によれば明治元年頃、発掘されたようで詳細については不明なものの石室が存在していたという。また、この塚を荒らす者には必ず殃があるとされている。こういった伝承を踏まえ、今回現地踏査を行った。

(西光慎治)

#### 2. 踏査報告

平田笠原古墳は檜隈地域と稲渕地域とを画する尾根が南北に伸びており、そこから東西に伸びる丘陵上に位置している。丘陵一帯では蜜柑が植樹されているが古墳周辺は雑木林となっており、草木が生い茂った荒れた状態となっている。古墳の範囲は東西約9m、南北約40mで、植林等で明確ではないが古墳状隆起が確認できる。その中央部付近には深さ約1.8m、長径3.6m四方の窪みが存在している。この窪みは明治時代の痕跡と考えられるが石材等は露出していない。伝承によれば石室が存在したとされており、詳細は不明なものの現状では横穴式石室又は横口式石槨であったか判然としない。檜隈地域周辺の丘陵部にはカイワラ1号墳・2号墳(明日香村教委2010・2011)のように横穴式石室を伴う古墳も確認されており、今後さらに周辺部の踏査を行い、検証していきたい。

(西光慎治)

#### 3. 表採遺物

今回の調査では表採遺物等は確認できなかった。

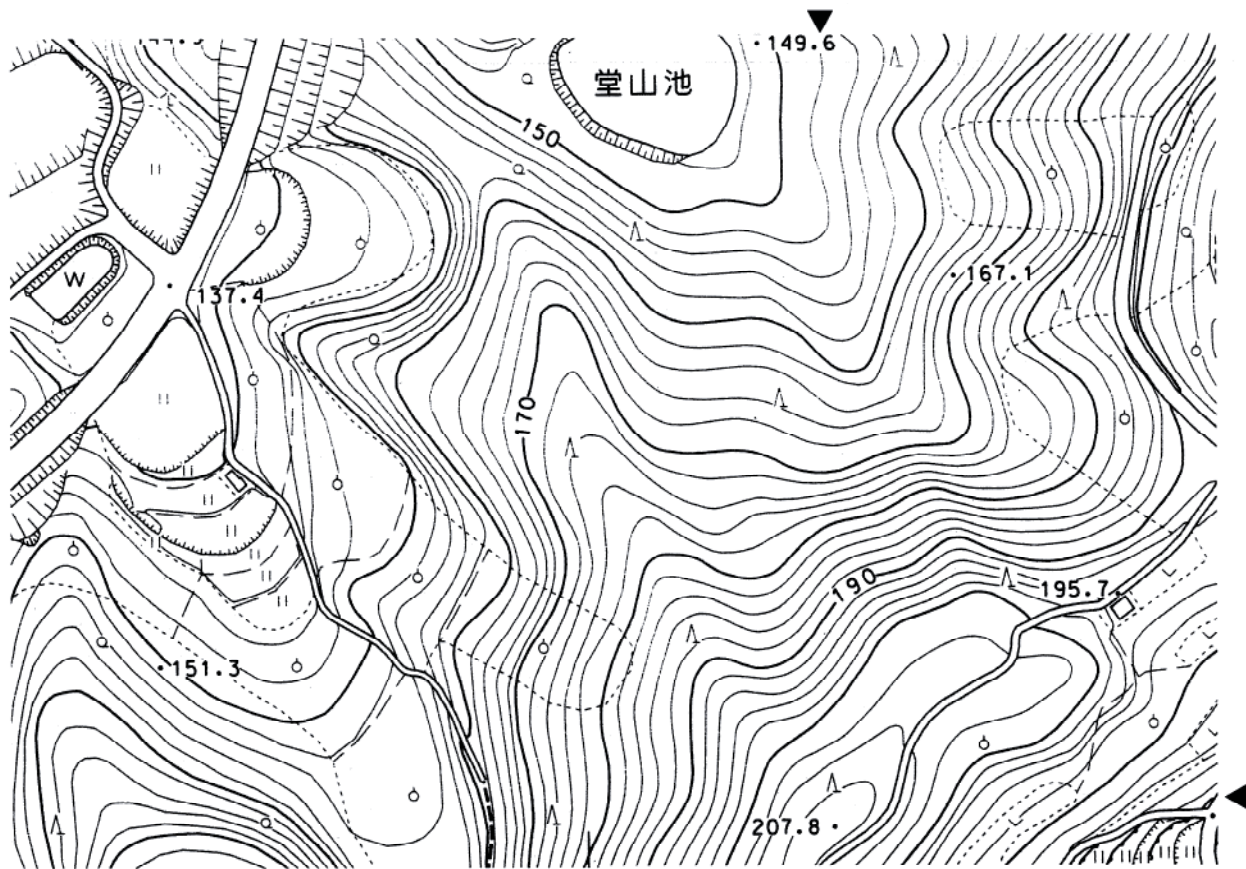
(西光慎治)

#### 【引用・参考文献】

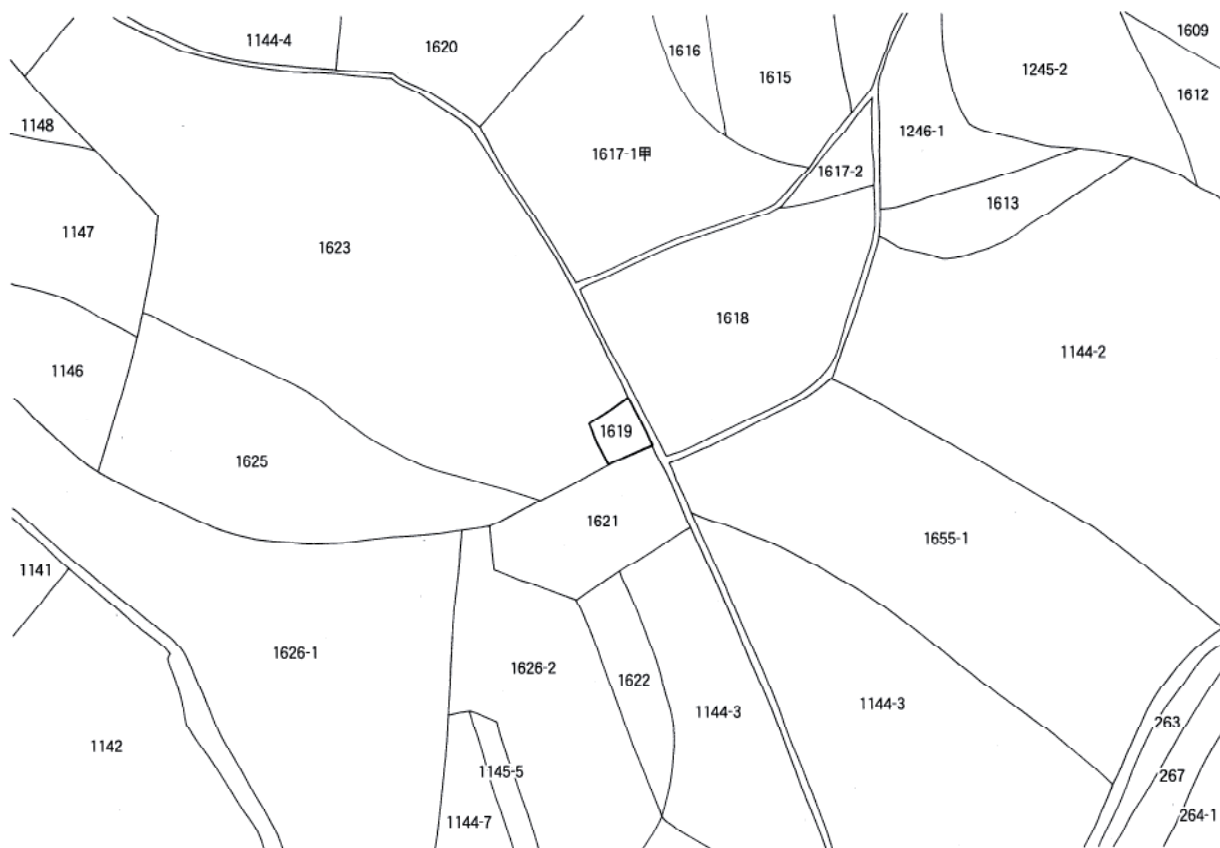
高市郡役所編1925『高市郡古墳誌』

明日香村教育委員会2010「阿部山遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成20年度』

明日香村教育委員会2011「阿部山遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』



第11図 平田笠原古墳位置図 (1:2000)



第12図 平田笠原古墳周辺地籍図 (1:1000)

## 第4節 <sup>かむら</sup>上コザカ古墳・上墓ノ上古墳踏査報告

### 1. はじめに

上コザカ古墳は明日香村大字上小字コザカに、上墓ノ上古墳は明日香村大字上小字墓ノ上に所在する後期古墳である。古墳一帯は数百基あるとされる細川谷古墳群が展開している。細川谷古墳群は冬野川を挟んで両側の尾根上に位置し、右岸には打上古墳(西光2007)をはじめ、多くの馬具が出土した上5号墳(樫考研2003)があり、左岸には結晶片岩の箱式石棺のある戎成組田古墳(西光2004)や鈴等が出土した堂の前塚古墳(西光2003)が存在している。細川谷古墳群の多くの古墳が急峻な場所にあることや石取りなどで半壊しているものが多い。こういった中で上コザカ古墳と上墓ノ上古墳については比較的残存状況が良好であることから今回、踏査を実施した。  
(西光慎治)

### 2. 踏査報告

#### (1)上コザカ古墳

龍門山系から伸びる尾根の先端に位置している。周辺は水田となっており、畦の斜面に石室の一部が露出した状態となっている。墳丘について半壊しているものの直径約10m前後の円墳と考えられる。埋葬施設については南に開口する横穴式石室で石室規模は玄室幅が約1.9mを測る。石室は半壊状態で現在は農小屋として利用されている。

#### (2)上墓ノ下古墳

多武峰から伸びる尾根上に位置している。古墳は上大字の集団墓地内にあり、石室が露出した状態となっている。墳丘部分の大半は失われているが円墳と考えられる。埋葬施設は南に開口する横穴式石室で規模は現状で長さ4.5m、幅1.3mを測る。石室内は土砂で埋没している。石室石材は石英閃緑岩の大石が用いられている。石室側壁については二段ないし三段積みとみられ、天井石は二石残存している。羨道部は失われている。  
(西光慎治)

### 3. 表採遺物

今回の調査では表採遺物等は確認できなかった。

(西光慎治)

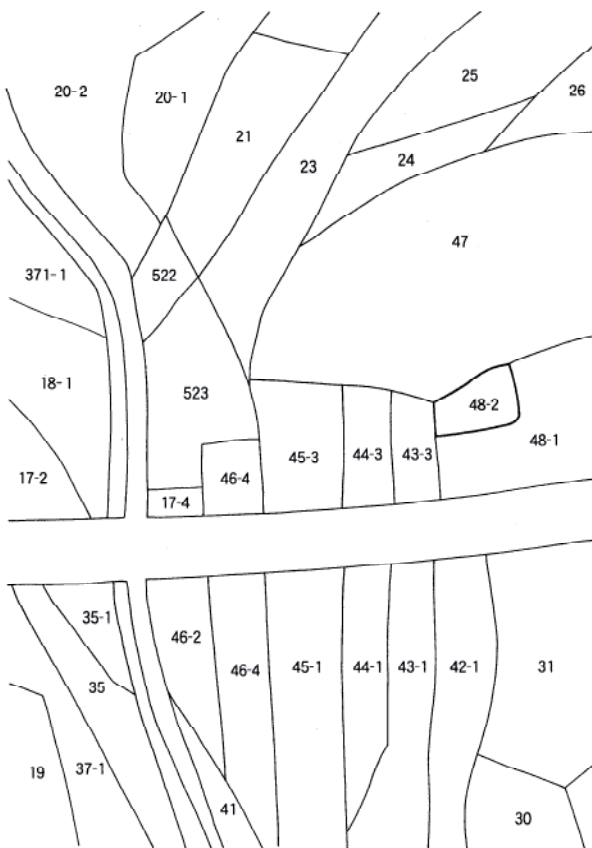
#### 【引用・参考文献】

- 奈良県立橿原考古学研究所2003『奈良県高市郡明日香村－細川谷古墳群－上5号墳』奈良県文化財調査報告書 第112集  
西光慎治2003「飛鳥地域の地域史研究(4)細川谷古墳群・堂ノ前塚古墳誌」『明日香村文化財調査研究紀要』第3号 明日香村教育委員会  
西光慎治2004「飛鳥地域の地域史研究(5)結晶片岩使用古墳研究序説」『明日香村文化財調査研究紀要』第4号 明日香村教育委員会  
西光慎治2007「打上古墳測量調査報告」(「王陵の地域史研究」所収)『明日香村文化財調査研究紀要』第6号 明日香村教育委員会

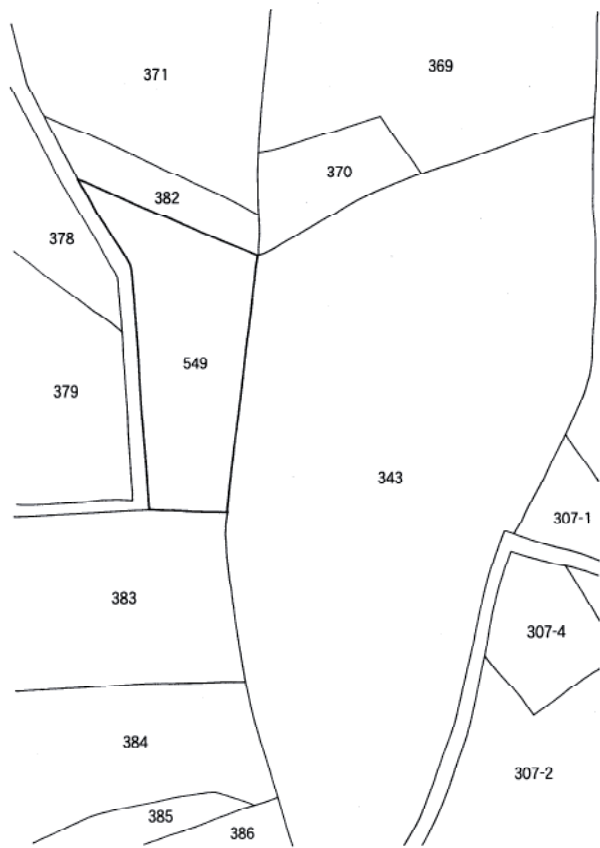




第13図 上コザカ古墳・上墓ノ上古墳位置図



第14図 上コザカ古墳周辺地籍図(1:1000)(△)



第15図 上墓ノ上古墳周辺地籍図(1:1000)(▲)

### 第3章 総括

王陵の地域史研究も今年で18年目を迎えた。これまで飛鳥地域の多くの後・終末期古墳の測量調査を実施し、時には明日香村以外の周辺地域の古墳の測量調査を通じて飛鳥地域の後・終末期古墳との比較研究を行ってきた。今回は実測済で未報告であった岩屋山古墳の石室実測報告と檜隈地域と細川谷古墳群で行った踏査報告を掲載することができた。特に細川谷古墳群はそのほとんどが未調査であり詳細についてはわかっていない。こういった中で古墳群の基礎データの収集が待たれるところであり、今後も継続して踏査・実測調査を進め、古墳群解明に向けて取り組んでいきたい。

このように測量調査や踏査は時間と労力を有し、なかなか短期間で成果があがるものではないが、これまで遺跡の希薄であった地域で新たに遺跡を確認することができた事例も少なくない。今後も継続して飛鳥地域の後・終末期古墳の測量調査と踏査を行い、飛鳥地域の地域史像解明に向けた基礎資料の充実を図っていきたいと考えている。

(平成28年1月5日稿了)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	おうりょうのちいきしけんきゅう						
書名	王陵の地域史研究						
副書名	飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告X						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編者名	西光慎治						
著者名	西光慎治、辰巳俊輔						
編集機関	明日香村教育委員会事務局文化財課						
所在地	〒634-0141 奈良県高市郡明日香村大字川原91-3 TEL 0744-54-5600 FAX 0744-54-5602						
発行年月日	西暦2016(平成28)年3月28日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
岩屋山古墳	奈良県高市郡明日香村大字越小字岩屋516-2他	29402	17A151	34度27分56秒	135度47分31秒	平成22(2010)年5月～平成23(2011)4月	学術
平田笠原古墳	奈良県高市郡明日香村大字平田小字笠原1619	29402	—	34度27分29秒	135度48分55秒	平成27(2015)年4月～平成27(2015)11月	学術
上コザカ古墳	奈良県高市郡明日香村大字上小字コザカ17-4	29402	17B179	34度27分44秒	135度50分35秒	平成27(2015)年4月～平成27(2015)11月	学術
上墓ノ上古墳	奈良県高市郡明日香村大字上小字墓ノ上549	29402	17B156	34度27分52秒	135度50分42秒	平成27(2015)年4月～平成27(2015)11月	学術
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
岩屋山古墳	古墳	飛鳥時代	横穴式石室	—		精緻な切石を用いた横穴式石室	
平田笠原古墳	古墳	古墳時代	—	—		明治時代に石室が破壊されたという伝承あり	
上コザカ古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室	—		—	
上墓ノ上古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室	—		—	